

研 究 紀 要

国 語 部 会

実践発表 1

「受験校における「文学国語」のあり方」について

青森県立五所川原高等学校 原 田 仁 弘 …… 1

実践発表 2

『I B 文学とは?』～準備 3 年＋開講 5 ヶ月の実践報告～

青森県立青森南高等学校 亀 田 睦 典 …… 3

公開授業・研究協議

古典探究 青森県立三沢高等学校 菅 原 夢 …… 6

論理国語 青森県立三沢高等学校 大 友 千 草 …… 9

部 会 の 動 き …… 11

研 究 テ ー マ …… 12

紀要編集委員 田 村 拓 己（青森県立八戸商業高等学校）

国語部会

実践発表 1

受験校における「文学国語」のあり方について

発表者	青森県立五所川原高等学校	原 田 仁 弘
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	青 木 雅 俊
司 会	青森県立八戸西高等学校	大 嶋 晃 子
記録者	青森県立八戸西高等学校	大 嶋 晃 子

1 研究のねらい

本県において「受験校」（進学校）と称される学校では、2 学年以降の教育課程において、ほとんどが『論理国語』および『古典探究』で構成され、『文学国語』の取り扱いがあまりない。採用の経緯については、各校で違いがあるだろうが、本校では令和 2 年度の「学習指導委員会」で教育課程の話し合いが行われた際、『論理国語』の採用については「共通テストの出題を考えると、新傾向である実用的な文章の読解に対応できる科目だから」という主旨で、『文学国語』については「人文学系学科への進学が考えられる文系のみ、当該科目を選択履修できるようにするため」という主旨で、教科としての意見が出され、認められた経緯がある。

対して関東近辺の学校（特に私立学校）では『文学国語』を現代文分野の中心に据えているところも数多く見受けられる。文系・週 1 単位の授業をとおして、生徒の読解力向上に必要不可欠なことに取り組ませつつ、課題点を探っていききたい。また、1 年で学習する『言語文化』や、『論理国語』との連携も図っていききたいと考えた。

2 研究の概要

2 年文系クラス（2 クラス合計 73 名）の授業において、定番教材である「山月記」を題材として取り上げることとした。その中で課題提出・ペアワーク・演習を用いつつ、定期考査の結果分析をふまえて、次の教材に合わせた新たな課題設定をしようと考えた。なお、授業に関しては次の手順でプリント教材を配布し、具体的な内容を順序立てて考えられるようにした。

（1）学習プリント

主人公・李徴の性格や行動についての重要語句を辞書で意味調べさせ、提出させる。

※「知識・技能」としての評価にも加える。

（2）読解プリント/場面Ⅱ・Ⅳ

李徴と袁傜の関係や袁傜の役割を、ペアワークで確認させつつ、李徴が虎に変身する経緯をしっかりと把握させる。また、“理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からず生きていくのが、我々生き物のさだめだ”という表現に注目させ、今後の展開のカギになることを示唆し、理解させる。

（3）読解プリント/場面Ⅴ～Ⅶ

この題材の中心となる表現「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」について、演習形式で取り組ませた（適宜、隣席の生徒同士で交換・確認）。プリントを対比させながら、主人公・李徴が最後によりよく“人間らしい良心”を後悔とともに取り戻していくようすを捉えさせる。

3 研究の成果

定期考査の平均は、学年平均が 59.1 点とまずまずだったが、記述力を図る問い（制限字数 70 字ならびに制限字数 40 字）においては、正答率が低かった。こちらの想定以上に、必要不可欠の内容を含めて書けない（まとめられない）という結果が残った。特に制限字数 70 字の問題においては、全体 8 点配点のうちの前半部分の条件が書けず、半分の得点となった者が半数を占めた。前述した「学習プリント」ではペアワークを用い、「読解プリント」では演習形式で、生徒が主体的に考えるように促したのだが、まだ不十分という結果が残ってしま

った。昨年度(1年時)も担当した生徒たちだったが、昨年度も長い字数で記述をまとめることが苦手な傾向にあったことを考えると、今後も授業内で「話す(話し合いをする)」ことをさせ、まとめさせる活動をもっと取り入れなければならないと、改めて認識することとなった。

4 今後の課題

現在は“平成の小説”と題された、角田光代作「鍋セット」を題材に取り組みを進めている。ただ、週1単位の授業時間であるため、進度はあまり進まない。3年文系クラスでも同様の実施形態となっているが、やはり進度は上がらず、定期考査では安部公房の作品を中心とした大問2題の出題となったようである(ただ、今年度の3年の担当教員は『論理国語』と『文学国語』の両方を担当しており、『論理国語』で実施した“比べ読み”を大問2に配置し、総合的な読解力定着を図っているという大きな違いがある)。

今年度も本校では「学習指導委員会」において(今後の教育課程見直しも含め)各教科の時間数検討を続けている。本校国語科教員の中でも『文学国語』不要論がなかった訳ではないが、共通テスト現代文分野に含まれる小説教材の取り扱いはぞんざいにできないので、各学年担当者としても悩ましく感じているところではあるようだ。今後も生徒が主体的に活動できるような教材づくりをすることが最重要だと考えるが、『言語文化』の小説教材の取り扱いも含め、現代文分野を国語科全教員で共有し、『現代の国語』や『論理国語』と連動させる仕組み作りを進めていきたいところである。本校の現状から考えれば、“現代文分野専門”担当を中心とした教材づくりをするところから始める必要があると思われる。

『I B 文学とは?』～準備 3 年+開講 5 ヶ月の実践報告～

発表者	青森県立青森南高等学校	亀 田 睦 典
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	山 口 浩 順
司 会	青森県立八戸西高等学校	大 嶋 晃 子
記録者	青森県立八戸西高等学校	大 嶋 晃 子

1 国際バカロレア (I B) の使命

文部科学省 I B 教育推進コンソーシアムHPでは、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心・知識・思いやりに富んだ若者の育成」を【I B の目的】として掲げ、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、生涯にわたって主体的・積極的に学び続ける」という【I B の使命】が示されている。I B の使命を全うするためには、次に挙げる【10 の学習者像】を備えていなければならない。①探究する人 ②知識のある人 ③考える人 ④コミュニケーションができる人 ⑤信念を持つ人 ⑥心を開く人 ⑦思いやりのある人 ⑧挑戦する人 ⑨バランスのとれた人 ⑩振り返りができる人

2 I B の教育課程

I B の教育課程は **PYP** (幼児～小学生 3 歳から 12 歳) → **MYP** (中学生 11 歳から 16 歳) → **DP** (高校生 16 歳から 19 歳) という 3 部構成であり、中高一貫校では MYP から DP を 6 年間受ける。青森南高校では 2 年次から 3 年次にかけての 2 年間で、I B の使命を実現し得る生徒の育成 (DP 取得) を目指している。

3 「I B の理念・手法」対「学習指導要領」

双方の類似点及び相違点については、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(令和 3 年 4 月 28 日)において資料が提示されている。また、「I B 文学」対「国語」の類似点及び相違点については、東京学芸大学教職大学院准教授中村純子や明治大学教授中村敦雄の先行研究がある。前者は I B プログラム「言語 A」のカリキュラム分析から得られた知見をもとに国語科教育を照射し、今後の国語科教育が取り組むべき方向性を考察したものである。後者は I B の学習指導過程における「7 つの概念」の有効な取り扱い方を考察した上で、ATL スキルとの関連性を含め、臨牀的・実証的アプローチの必要性を説いている。共に「I B 文学の理念や手法」をいかに「日本の国語科教育」に取り込めるか、その可能性と意義を示唆したものとなっている。

4 【7 つの概念】と【5 つのグローバルな問題】

I B 生がテキストを鑑賞・分析する際には【7 つの概念】＝①アイデンティティ ②文化 ③創造性 ④コミュニケーション ⑤観点 ⑥変換 ⑦表現 と【5 つのグローバルな問題】＝①文化・アイデンティティ・コミュニケーション ②信念・価値観・教育 ③政治・権力・正義 ④芸術・創造性・想像力 ⑤化学・環境・テクノロジー を、思考の糸口や着眼点としている。テキストを読解する際、任意の【概念】と任意の【問題】を掛け合わせ様々な角度から切り込むことによって、テキストに潜在する多様な断面模様を引き出そうと試みる。

5 読解時のアプローチ法

I B 生が身につけるべき学習のアプローチ法を【ATL】＝Approach To Learner＝①思考スキル ②コミュニケーションスキル ③社会性スキル ④自己管理スキル ⑤リサーチスキル と言い、I B 教員は指導のアプローチ方法である【ATT】＝Approach To Teacher＝①探究を基盤とした指導 ②「概念」理解に重点を置いた指導 ③「地域的な文脈」「グローバルな文脈」において展開される指導 ④協働に重点を置いた指導 ⑤学習の障壁を取り除いた指導 ⑥形成的/総括的評価を取り入れた指導 を用いて、生徒が【ATL】を体得できるよう配慮する。【ATT】は難しく感じるかもしれないが、①④⑤⑥は国内の教育においても既に行っている指導である。②③は I B 特有のアプローチ法と言える。②は、【7 つの概念】に則った指導のことを意味する。③は、地域的且つ時代的な文脈の中で紡がれた海外のテキストを、現代のグローバルな文脈の中で読んだ時に立ち現

れる断面模様光に光を当てた指導を意味する。

6 青森南高校グローバル探究科（40名）の教育課程—国語編—

1年次は文理共通で「現代の国語」と「言語文化」を履修する。2年次以降【グローバル探究コース】の文系／理系と、【IBコース】の文系／理系に分かれる。【グロ探コース】の生徒は「論理国語」と「古典探究」を履修する一方、【IBコース】の生徒は「IB文学」を学び、2年間でATLを体得しながらDP（ディプロマ）の取得を目指す。IB科目は①言語と文学 ②言語習得 ③個人と社会 ④理科 ⑤数学 ⑥芸術の6教科と、コア科目である⑧TOK（知の理論）⑨EE（課題論文）⑩CAS（創造性、活動と奉仕）から構成される。最終評価（＝DPグレード）について、教科科目（①②③④⑤⑥）は1～7点の範囲で、コア科目（⑦⑧⑨）は3つまとめて1～3点の範囲で評価される。全科目最高グレードの場合＝45点満点中、24点以上がDP取得ラインとなる。国内大学への進学に配慮し、IB科目を日本の科目に読み替え、また日本式の5段階評価にも対応させるが、その妥当性については全国のIB校における課題となっている。

7 評価試験

グレードは「内部評価」と「外部評価」を通して決定される。「内部評価」は校内でテストを行い、IB機構が定める評価規準に則り授業担当者が評価したものを、ジュネーブのIB機構に送る。「外部評価」はIB機構から送られてくるテストを用いるが、評価主体はIB機構であるためその内容を指導者が見ることはできない。

8 IB入試

IB入試は国内でも実施されているが、デメリットは設定している大学や学部学科がまだ少ないことである。しかし、AO・総合型入試や推薦型入試においては、DP未取得者であっても体得したスキル（ATL）で有利に戦うことができる。IB入試はIB生専用枠なので、IB生の独壇場となる。海外の大学に行く際もIB入試枠を利用することができるため、IBDPは海外進学する際の「共通パスポート」と言うことができる。

9 テキスト

「IB文学」には教科書がないため、「IB文学」担当教員が作品を選ぶ必要がある。例えば与謝野晶子の『みだれ髪』を学んだ後、参考文献として俵万智がチョコレート語で翻訳した『みだれ髪』を学び、更にチョコレート語とは何かを理解するために『チョコレート革命』も学ぶ。また、カフカの『変身』と『短編集』、太宰治の『人間失格』と『晩年』を比較対照したりしながら、テキストが空間と時間を越えて如何に関連しあいながら生成・受容されていくか、そのダイナミズムを体感できる。

10 質疑応答ならびに講評（実践発表1、2を併せて）

（1）質疑応答

◇原田先生の発表に対して：

〔青森南高校・藤川先生〕

定期考査において、70字の記述問題の正答率が悪かったということだが、理由として考えられることは何か。内容を理解できなかったのか、要素の含め方や書き方がわからなかったのか、考えをお聞かせ願いたい。

〔原田先生〕

授業と評価問題にズレがあったのかもしれない。授業で焦点を当てたところと評価問題として問うた箇所にズレがあり、生徒たちは授業で焦点を当てたところが強く記憶に残り、そちらを記述問題の要素として書いてしまった。問いの仕方を考える必要があった。

◇亀田先生の発表に対して：なし

（2）講評

〔青森県総合学校教育センター・青木指導主事〕

文学国語は感性・情緒の力を育成する科目とされており、文学教材自体に何が書かれているかを解釈するだけでなく、作品内容に共感したり、新たに創造したりする力を育成する科目と謳われている。例えば、作品を評価する活動を行い、生徒一人一人に解釈させ、様々な解釈のしかたがあることを認め合いながら、評

価をさせる。何を指標に評価するかというと、「ことば」である。ことばによる見方・考え方を働かせて、書かれ方に対してこの言葉の使い方は、この言葉の美しさは何かに徹底的にこだわって評価をさせる授業などもおもしろいと思う。

〔青森県総合学校教育センター・山口指導主事〕

I B文学の授業では、国語の教科書がないため、I B教員が13作品を選んで年間の授業を行っているという話に衝撃を受けた。そして、以前に読んだ『奇跡の教室』を思い出した。灘高校の橋本先生は『銀の匙』1冊を3年間かけて授業したそうだが、この本を3年間かけて学んだ生徒たちは、一生学び続ける姿勢を持ち、実社会でも旺盛な好奇心で教科書なき道を切り拓いていったと書かれてあった。たくましく成長し、社会で活躍してほしいとどの教員も願っている。探究心を育て、教科書なき道を切り拓いていける力を授業の中で育むことができればと思う。

古典探究

授業者	青森県立三沢高等学校	菅 原 夢
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	山 口 浩 順
司 会	青森県立八戸工業高等学校	高 谷 健 士
記録者	青森県立八戸西高等学校	平 川 彩 子

1 授業教材

『大鏡』南院の競射〔古典探究 古文編（数研出版）〕

2 授業者より

担任している文系のクラスである。成績の上下が激しく、日本語が拙い外国籍の生徒も在籍している。国語には意欲的で、普段の授業でも活発に活動をする生徒が多い。今日は生徒の活動を見せたかった。授業では大きく手立てをしなくとも、欲しい答えに到達した子、深い思考をしてくれた子が多かった。活動もグループのメンバーとコミュニケーションをとりながら意欲的に行ってくれたと思う。

普段からClassiを使うのが基本のスタイルである。助動詞など、問題を出す際にClassiNOTEを使う。今日のようにまとめの問題を扱う時にはグループのNOTEを使って授業をしている。

今日の授業の反省点としては、最初に目標を提示できなかったことである。Q2、Q3が今日の授業の目標の部分であったが、改めて説明すれば良かったと思う。また、まとめの問題に時間を割けなかったのが悔しい。グループ発表の後、書き手によって異なる描写になるということを伝えることができないまま終わってしまった。指導と評価の一体化については意識している。評価基準を事前に示し、解答を考えさせている。授業作りでは1回の授業でどのような力を身に付けさせようかということを考えている。

3 協議

（1）質疑応答（○質問：■回答）

○五所川原高校：村田先生

質問は3つある。ClassiNOTEはいつごろから活用しているのか。また、助動詞の知識の習得の際にはClassiNOTEをどのように使っているのか。「大鏡」についてはどう教えたのか。

■ClassiNOTEは三沢高校に赴任してからであり、昨年夏前から活用している。

■助動詞の学習は、昨年夏期講習でワークを中心に行った。しかし生徒は覚えていなかったため、2年次に古文の授業でリマスターさせたかった。そこで、本文に登場する助動詞を都度取り上げ、ClassiNOTEで問題を出して解かせてみた。これまでは一通り文法を学習してから作品に入っていたが、作品を読みながら助動詞の学習をする、問題を解くというのを今年度挑戦している。敬語を学習させる時も本文を読みながら、文法を教えるというやり方をとっているが、意外と理解してくれているという感じを受ける。

■単元の学習のゴールとして今日の活動を考えていた。大鏡は「道長の栄華を語る話」であり、男性的な視点で描かれているという説明をした。「栄華物語」との違いについても話していた。

○三沢商業高校：櫻田先生

ループリック評価がS、A、B、Cとあるが、指導案ではA、B、Cの評価となっているので対応しているのだろうか疑問に思った。あえてずらしている意図があれば教えてほしい。

■ClassiNOTEの設定がS、A、B、Cになっており、三評価A、B、Cにできなかった。

○青森商業高校：藤田先生

①S、Aの評価の基準を示さず、解答を書かせることはあるか。

■個人的には先に基準を示してから考えさせた方がよいのではないかと思い、心掛けています。

②藤原家の家系図などを、図説を使って調べさせたり、先生が提示したりすることはあるか。

■生徒は図説を持っていない。生徒には調べさせていなかった。

③図説を画面に投影するなど視覚的に示すことはあるか。図説を持っていないならどうしているのか。

■自身で調べたものを口頭で示すことはあるが、それを投影して生徒に見せることはない。タブレットで調べさせることはある。

④口語訳の確認は生徒の自学の成果なのか。

■口語訳は予習させ、授業で確認させている。

○弘前中央高校：松山先生

①Q3で2作品での人物の描かれ方の違いについて。生徒が自分で書いた答えは文学史的背景をふまえていないものだったが、グループで話し合った際には背景を踏まえたものになっていた。これは授業の成果としてたどり着いたのか、事前の指導が生きたのかどちらだと思うか。

■生徒の頑張りもあるが、最初は大鏡の性質・枕草子の性質について教えており ClassiNOTE にそれを載せていたのもあったのでそれを見て考えられたのではないかと思う。

②振り返りは毎時間行っているのか。ルーブリック評価は自作のものか。

■振り返りは単元毎に毎回 Classi で配信して行っている。ルーブリックは数研出版の指導書の中にあるものを活用したり、それを元に自分でアレンジしたりしている。

○七戸高校：高田先生

クラスの学力差に対してどう手だてしているか。授業は上の子、下の子、どちらに合わせたものか。

■成績が1番下の子は外国人。日本語が分からないものの授業では板書を写して頑張っている。理解できるか確認し、よく声をかけている。上の子に対しては特別な手だてはできていない。授業は中間から上を対象に行っている。1番上の子に対してどんな手だてをしているのか先生方にも聞きたい。

（2）学力差に対する授業中の工夫について

青森東高校：竹永先生

学力の高い生徒に対しては、演習問題をやるときに自分が解いた時間を伝え、それに挑戦させている。考察を記述させる時は「学年にはこういう答えの子がいる」と紹介し競争心を煽っている。

三本木高校：石川先生

全体に与えるものはハードルを低くし、できる子にはどんどんやれと言っている。できなかった子にはテストの後に呼び出しをしておさらいをさせている。

（3）グループ学習、タブレットの使い方の実践例、および学力差がある生徒への指導について

三戸高校：川崎先生

学力の低い生徒に対する指導として、「ここは見て欲しい」という部分を示している。タブレットの使い方は「気になったものは調べよう」と言っている。

七戸高校：高田先生

古文は最初にフィーリングで読ませたのち、グループで訳を考えさせている。訳が間違っていたとしても相談をして取り組んでいるので良い。興味関心を引き出すのには役立っていたのではないかと思う。

青森商業高校：藤田先生

口語訳は iPad で調べさせている。本文と訳がどう重なるかを授業で確認し文法については細かくは行っていない。物語として興味を持たせること、図説を使って視覚的に興味を持たせていくことを行っている。

4 助言者より

「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどう結びつけるかが大切である。「主体的・対話的で深い学び」を進める上で、コロナは学校に来られない子の学びができないという事態があることを浮き彫りにした。そこで、「主体的な学び」のために「個別最適な学び」を達成しようとしたとき配付されたのがタブレットである。タブレットを使って授業を行うということは我々教員の使命ではあるのだが、忘れてはならないのはタブレットが手段であり目的ではないということだ。

学校の事情もあり、ICTをそこまで活用していないという所もあるだろう。しかし Classi を使っていないから今日のような授業はできない、ということではない。タブレットは資質能力を身に付けさせるために、効率よく授業をすすめられるツールに過ぎない。一斉授業がだめ、グループワークを絶対やらなくてはいけないということでもない。外国籍の生徒がいる状態で、その子が理解できるように授業中注意をはらう等も「個別最適な学び」である。授業を展開する上で何が一番効果的なのかを考え、手法を選べばいい。今日の授業では生徒の解がグループの話し合いを通して深まっていたように感じられた。

菅原先生が反省点として挙げていた「目標を明示すること」について。ゴールを示し、そこに到達できたか、

できていなかったのかを生徒が考えられるようにするのは必要。目標を示せば、そこに向けてどう努力すればよいのかを考えさせられる。目標を示すことはできなかったと仰っていたが、タブレットに示した質問によって視覚的に、また、先生の言葉を用いて、何をすればよいのかを示すことができていたと思う。

コロナ前のように授業を“当たり前のように受けてくれる生徒”というのは半分程しかいないということを認識している必要がある。残りの半分は何かしらの“ハンデ”を抱えた生徒である。多様な生徒にどうしたら最適な学びが提供できるのか、それぞれの学校の事情も違うので今日の授業と同じでなくとも、それぞれの学校に合わせたことをやってくださればいい。

論理国語

授業者	青森県立三沢高等学校	大友千草
助言者	青森県総合学校教育センター指導主事	青木雅俊
司会	青森県立百石高等学校	工藤結衣
記録者	青森県立八戸西高等学校	長内美貴

1 授業教材

「「具体」から「抽象」へ」森博嗣〔論理国語（数研出版）〕

2 授業者より

今回のクラスは理系の中で学力的に下ではあるが、周囲と話し合う機会を作ると熱心に話し合える集団である。授業で使用するワークシートは他担当者とともに内容を考えている。本日扱った総まとめでは ClassiNOTE を使ったが、話し合いの機会を持てればさらに理解が深まったのではないかな。なお、他クラスでの実践で、読解は頑張れるが自分で例を考えることに苦戦していた生徒が多かったため、今回の授業後半では例題2を挟み、本命の課題に取り組ませた。

自己評価についてだが、単元の最後の時間に必ず実施するようにしている。筆者の主張に基づき、日常生活から身近な例を探すという言語活動は今回が初である。教材によって、総まとめとしての言語活動は内容・やり方を変えている。他の学校・単元で言語活動にどのような例があるかを知りたい。

3 協議

（1）質疑応答（○質問：■回答）

○百石高校：木村先生

一緒に組む先生と打ち合わせる上で、細かいすり合わせはどのようにしているのか。

■学年2名で担当。目標がずれないように要所要所で打合せしている。ワークシート作成は交代で行っている。どちらかの授業の進みが早い場合も、情報共有を重視し授業づくりに活かしている。

○青森南：藤川先生

評価基準をどう生徒に示すか。

■振り返りシートは期日を示して提出させチェック、時にはコメントを入れて返却している。B→Aにする方法等については生徒の前で説明する予定。

○弘前高校：伊藤先生

本日のテーマである「指導と評価の一体化」、また設定した評価基準に則って考えると、本日の生徒の答えはどうか。

■全体的に書けていない。Aに該当する生徒は少ないと考える。

○青森中央高校：村山先生

混乱する生徒に対するケアはどのように行っているか。

■本日の提出物の内容を踏まえ、本文を振り返り「抽象」についての確認を行う。

○三本木高校：高橋先生

評価基準のA「利点がわかるように」とあるが、そのように書けているか否かをどこで判断するのか。

■本文に基づいて考えているか、筆者の主張に基づいた「新しいアイデア・発想」に繋がっているか等の観点で確認できると考える。

○八戸東高校：小山内先生

理系文系で時数差がある現状、どうクリアしているか。

■理系ではコンパクトバージョンに変える等の工夫をしている。

（2）参加者から寄せられた、言語活動の実施例

・八戸北高校：岩崎先生

各単元自己評価A, B, C & なぜその評価かの理由・根拠を書かせる

・黒石高校：寺内先生

ICTの授業利用や課題配付を行っているほか、紙の利点も考え使い分けるようにしている。

- ・大湊高校：本田先生

言語活動として、イラストでの表現で読解内容を確認する。

- ・青森明の星高校：近藤先生

ICTと言語活動との結び付け方に課題を感じている。

- ・青森高校：相澤先生

ICT、学校によって違うのが転勤した際大変になる。本文を自分でまとめる作業にICTを活用した。

- ・百石高校：鎌田先生

ビブリオバトル、筆者と同じような表現がないか考えさせる。日常に活かせることを念頭に置いた活動を考えている。

- ・八戸東高校：佐藤先生

言語活動の実践の難しさを感じている。教材・単元で学んだことを日常生活、実生活でどう活かせるか考えるのが重要だと感じた。

- ・野辺地高校：田中先生

教材・単元について学んだこと、まとめたことを、生徒同士で見せ合ったり、なぜそう考えたか話し合わせたりすることなどができるのではないかな。

4 助言者より

今回の公開授業では、挑戦的な単元において、本文・筆者の主張を元に、自分の考えを形成するという取り組みである。探究には、問い・手続き・解答をどこまで生徒の手で行わせるかがレベルの難度に関係してくるが、今回の授業では、自分の考えを広げたり深めたりすることを目標にしていた。そういう意味では生徒にとって難しく、これまで具体化を求められてきた生徒にとって、抽象的なものの見方が役立つことそのものを知ること自体が学びとなった。

評価についての確認だが、生徒に目指させたいのはBであり、そこに届かないCのための手立てがある。そう考えると、今回の評価基準にあるAがBに当たるのではないかな。そうなるための事前の活動・準備としての例題1・2が大事になってくる。授業で扱われた例題1には、踏襲した問いをやらせるのが追体験になるのではないかな。そういう意味で、問いの設定を検討することも非常に重要だといえる。ICTについても、使いどころ・使い方を考え活用していくことで、生徒の理解をさらに深める助けとなるだろう。

部 会 の 動 き

- 1 令和7年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第1回役員会
 期 日 令和7年6月11日（水）
 場 所 オンライン
 案 件 令和7年度役員改選及び承認
 令和6年度庶務報告
 令和6年度監査報告、決算報告
 令和7年度予算案審議、事業計画

- 2 令和7年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第1回理事会・研修会
 期 日 令和7年6月25日（水）
 場 所 青森市立筒井南小学校
 案 件 各部会活動状況報告
 令和6年度庶務報告
 令和6年度監査報告、決算報告
 令和7年度予算案審議、事業計画

- 3 令和7年度 青森県高等学校教育研究会国語部会研究大会及び総会
 研究主題 ことばへの自覚を高め、理解し表現する資質・能力の育成
 ～指導と評価の一体化を目指して～
 期 日 令和7年8月19日（火）
 場 所 青森県立三沢高等学校

- 4 高教研国語部会 各地区大会（下記は担当校）
 西地区 青森県立弘前工業高等学校
 中地区 青森明の星高等学校
 東地区 青森県立三沢高等学校（※県大会を兼ねる）

- 5 令和7年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第2回理事会・研修会
 期 日 令和7年8月29日（金）
 場 所 青森市立筒井南小学校
 案 件 各部会活動状況報告
 令和9年度東北地区国語教育研究協議会青森大会事業計画案

- 6 全国高等学校国語教育研究連合会第58回研究大会 宮城大会
 兼 第70回東北地区国語教育研究協議会 宮城大会
 令和7年度東北地区国語教育研究協議会 第1回役員会・研修会
 研究主題 小・中・高をつなぐ国語教育の創造 ～学びの深まりを目指して～
 期 日 令和7年10月30日（木）～31日（金）
 場 所 トークネットホール仙台（仙台市民会館）
 仙台市内の高等学校・中等教育学校（6校）

- 7 令和7年度 青森県高等学校教育研究会国語部会第2回役員会
 期 日 未定（例年は1月～2月）
 場 所 オンライン
 案 件 令和7年度庶務確認、中間収支決算報告
 令和8年度予算案審議及び事業計画案、県大会実施内容

- 8 令和7年度 青森県小・中・高国語教育研究協議会第3回理事会・研修会
 期 日 未定
 場 所 未定
 案 件 各部会活動状況報告
 令和7年度庶務・中間決算報告
 令和8年度予算案審議及び事業計画案
 令和9年度東北地区国語教育研究協議会青森大会事業計画案
 東北地区国語教育研究協議会役員会報告

研 究 テ ー マ

紀要 (集)	年度	研 究 テ ー マ	会 場	会 員 数 (一・二希 望計)	大 会 参 加 数	大会 発表 者数
40	7	○主体性を育む国語教育の学習指導	弘 前 南 高 校	387	236	2
41	8	○新しい学力観に立つ学習指導	青 森 中 央 高 校	372	205	2
42	9	○豊かな国語力を育む学習指導を求めて	八 戸 高 校	393	267	6
43	10	○学力充実を図るための指導法を求めて	五 所 川 原 高 校	367	166	2
44	11	○基礎学力の定着と応用力の充実をめざす学習指導	青 森 戸 山 高 校	393	193	2
45	12	○確かな国語力を育てる学習指導のあり方	八 戸 西 高 校	377	168	2
46	13	○自ら学び自ら考える力の育成をめざしてー生きる力の指導法を探るー	黒 石 高 校	357	170	2
47	14	○国語の力を高めるための学習指導を目指して	青 森 東 高 校	353	174	2
48	15	○生きてはたらく国語の力～不易流行の視点から～	弘 前 高 校	342	180	3
49	16	○豊かな国語力を育む学習指導のあり方	三 沢 高 校	344	123	2
50	17	○「生きる力」と「夢」を問える国語力を求めて	青 森 南 高 校	322	138	2
51	18	○「確かな国語力」の充実を目指して	八 戸 東 高 校	297	125	2
52	19	○豊かな表現力と確かな読解力を高める授業を目指して	弘前学院聖愛高校	294	134	2
53	20	○確かな国語力と思考力の向上を目指して	田 名 部 高 校	300	103	2
54	21	○確かな国語の力をはぐくむ指導の在り方	青 森 高 校	255	139	6
55	22	○人の中の国語 国語の中の人	木 造 高 校	255	110	2
56	23	○「国語」の遠近法ー俯瞰と回遊ー	青 森 西 高 校	308	112	2
57	24	○伝え合う力を高める言語活動の充実を目指して	三 本 木 高 校	298	99	2
58	25	○「ことば」を大切にする国語教育の充実を目指して	弘前中央高校	298	134	2
59	26	○「言語活動」で引き出す主体的な学び	青 森 北 高 校	285	115	2
60	27	○確かなことばの力をはぐくむ国語学習ー思考力・表現力を高める言語活動の充実を通してー	八 戸 高 校	273	146	6
61	28	○感じる力、考える力、伝え合う力を高める国語学習をめざして	東 奥 義 塾 高 校	267	115	6
62	29	○“新しい学力”を錬成する“新しい学び”の探究	青 森 中 央 高 校	264	106	2
63	30	○新しい時代に必要となる資質・能力を育む国語教育を目指して	八 戸 北 高 校	248	107	2
64	1	○「言葉による見方・考え方」を働かせる国語科授業の創造	弘 前 南 高 校	264	127	2
65	3	○「確かで豊かな学びの創造ー「言葉による見方・考え方」を働かせてー	WEB開催	245	多数	1
66	4	○「ことばの力」を育み「学びの実感」ができる国語学習をめざして	八 戸 西 高 校	224	87	2
67	5	○変化する社会に主体的に対応できる“資質・能力”の育成～ことばによる見方考え方を働かせて～	アピオあおもり	231	76	2
68	6	○たしかな「ことばの力」で、資質・能力の向上をめざして	五 所 川 原 高 校	220	69	2
69	7	○ことばへの自覚を高め、理解し表現する資質・能力の育成～指導と評価への一体化を目指して～	三 沢 高 校	210	64	2